
Friends

micky

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F r i e n d s

【Nコード】

N 3 1 1 7 B

【作者名】

m i c k y

【あらすじ】

服部の知らない2人の出来事から話を始めていきます。沖田×和葉×平次でいきます。かなり読みにくいかと思いますが、なんとか最後まで書こうとおもいます。単純なラブです。

F r i e n d s 1 沖田サイドと和葉に一目ぼれ（前書き）

沖田サイドから話を進めます。

関西弁・・・関西の皆さんごめんなさい。

F r i e n d s 1 沖田サイドと和葉に一目ぼれ

―浪花中央体育館裏―

俺な。実は剣道なんてあんまり好きやない。

家が道場やってて仕方なしにやってるだけやし。

せやのになんでやろ。

みんな期待しすぎや。

俺はやりたい事見つけたらすぐに剣道なんか止めんのにな。。。

みんないい加減に俺の気持ちも理解してほしいわ。

ほんで拳句の果てに主将やらされてるし。

こんな大会なんてホンマ面倒くそーてかなわん。

なんかええ事ないやろか。。。

。。。ある訳がないな。

たかが剣道の大会に何を俺は求めてるんやろ。

「はあ。。。」

アカン、ため息ついてしまった。

しゃーないな。2回戦位まではこの静かな場所で休憩でもしとこ。

今日は天気も晴れやし、ええ風も吹いてるし・・・。

なんもないならここで休んでもバチなんか当たらんやろ。

ああ・・・ホンマに眠とうなってきた。

「ここにもおれへん…平次どこ行つたんやろ？」

ん？なんや？

閉じていた目を少し開けて声の主を見る。

こんな所に誰も来ん思つたのに予想外や。

やって来たセーラー服にポニーテールの女の子を下から見上げる。

「オバチャンも待ってるし、はよ見つけな…」

誰か探してるみたいやな。

まっ、俺には関係ないしもう一眠りするか。

「平次…」

はよ向こうに行ってくれんやろか。

気になって眠れん。

チラッとみると大きな黒い瞳にぎょうさん涙溜めて…。

やばい。目が冴えてきてしもうた。

・・・しゃーない。

「どないしたんや？」

横になったままやけど、思わず声をかけてしもうた。

その子はびっくりしてこっちを見よった。

俺が昼寝しとるのに気がつかんかったみたいや。

返事がないのでもう一度声をかけてみる。

「誰か探しとるんか？」

俺は上半身を起こして彼女をみた。

「えっ…あ…ごめんなさい。寝てたん気がつかんで…」

彼女は慌てて制服の裾で涙を拭い、大きく頭を下げた。

改めてみるとやっぱりこの子カワイイ。

うちの高校にもそれなりに可愛い子とかおるけど…。

「…別に気にせんでもええから。人、探してるんやろ？」

その子はコクンと頷いた。

「平次…服部平次っていう色の黒い男の子見かけませんでしたか？」

色黒の服部平次って…。改方のか？

少し前にこっち見てたん確かアイツや。

携帯を手に持って行った先は…。

「そんならさつき別館のほうへ歩いて行ってたで」

彼女は目を輝かせて

「ホンマに！良かった。おおきに！」

そして別館へ歩き出そうとした時、彼女の手を思わず引っ張ってしまった！

「え？」

彼女びつくりしとるやないか！
なにやってんねん俺！

「名前・・・あんたの名前が知りとうて・・・」
口が勝手に動く。

「名前？」

俺が頷く。

すると遠くから

「遠山先輩」。服部先輩が別館のトイレに入っていくのをみた奴が
おるって！」

「遠山？」

彼女は頷いた。

へー遠山っていうんや。

「うち遠山和葉っていうねん」

「！」

彼女の笑顔が眩しくて思わず手を離してしまった。

そしてそのまま彼女は別館の方へと走って行った。

「遠山和葉」

俺はその名前を何度も何度も心の中で繰り返した。

よし！

「決勝は多分・・・服部やな」

あいつはそれなりに強いけどまだまだや。

前に戦った時は俺の勝ちやったし・・・。

俺も彼女の前では負けたくないし。

あいつも同じ気持ちかも知れんけど、悪いな。

手加減せえへんで！

・・・結局。

あいつは試合に来なかった。

試合会場で彼女の姿を見かけたけど、まだ服部を待っているようだった。

けな気やなあ・・・。

そんなところがまた可愛らしゅうてええんやけど。

それはそうと、彼女は俺に気づいてくれたんやるか？

なんか忙しそうやし、また今度会った時に話かけてみようか。

それともいつそ会いに行こうか・・・なんて。

なんやろな、この気持ち。

F r i e n d s 1 沖田サイド 和葉に一目ぼれ (後書き)

和葉が男子トイレまで入って平次を呼びに行ったお話を広げてみました。

F r i e n d s 2 沖田サイド〜これからが勝負〜（前書き）

短編の『ご愁傷様』のサイドストーリーです。

F r i e n d s 2 沖田サイドこれから勝負！

和葉ちゃんの事が頭から離れん。

そんな気持ちのなかで、剣道の全国大会が東京であって・・・再会してしもうた。

最近集中力に欠ける俺を親友が心配していて

「振られてええから告白してこい！」

って俺の背中を押したんやけど、おかしい・・・足が動かんや。

ため息をついてそいつが

「俺が呼んできたるから、後はなんとか自分でせいよ」

と和葉ちゃんの所へ走って行った。

突然の再会。告白。

心臓が爆発しそうや・・・。

「あつちで待つてるから行ってこい！頑張れよ沖田！」

ありがとう・・・持つべきは親友や・・・。

言われた場所に行くと、髪の高い綺麗な女の子が立っていた。
その子が俺の方を見て

「沖田君？」

「はあ、そうですね・・・」

近くで見るとさらに綺麗でびっくりした。

「ゴメンね・・・和葉ちゃん好きな人がいるの」

あ・・・そうか。

そうだよな・・・でも

「俺、この前一回会っただけなんやけど、あの笑顔が頭から離れんで・・・消そうとしても・・・考えれば考えるほどあの時の笑顔が蘇ってくるんです。多分・・・一目ぼれやと思います。こんな気持ちには初めてやから自分でもどうしていいか・・・」

彼女は顔を赤らめて

「素直な人なんですネ」

そう言って下を向いてしまった。

「そんな事・・・。そうですね、和葉さん彼氏がおるんですか」と

「彼氏・・・というか幼馴染ですけど・・・いずれはそうなると思います」

困ったように言った。

ん？じゃあ彼氏がおらんちゅー事？

「じゃあ・・・俺、負けないうちに頑張ります」

「え？」

「ありがとう。和葉さんによろしゅう言っというて下さい」
彼女の両手を握り締めた。

アレ・・・なんやいま背中に殺気を感じたような。

まあ・・・ええわ。

そうか彼氏やなかったんや。

俺は仲間のもとへと足取り軽く戻っていった。

「その調子だと上手くいったんか！」
親友が嬉しそうに聞いてきた。

「これからや！これから！！」

その日の試合も俺は優勝したが・・・。

アイツはまた試合を放棄しよった。

彼女達の姿もみえん。

まあ・・・ええわ。

これで心おきなく会いに行けるんやし。

今度は自分から会いにいかなあかな。

そう心に決めて帰りのバスに乗り込んだ。

F r i e n d s 2 沖田サイド〜これからが勝負！〜（後書き）

新一の殺気を感じていた沖田君。
可哀想に・・・。

F r i e n d s 3 和葉サイド〜沖田参上〜（前書き）

ここから2話は和葉サイドで話を進めます。

かなり文章が変になってしまいましたが、読んで頂ければ幸いです。

Friends 3 和葉サイド 沖田参上

今日は改方学園2学期の終業式。

平次はありがたい(？)校長先生の話の最中に刑事さんに呼ばれて行ってしまうた。

平次が真剣な顔で体育館を去っていく。

その顔・・・好きな事は好きやけど、心配も同じくらいしとるんよ。そやからお願いや。
はよ帰ってきてな・・・。

平次の去っていく背中にそう心の中で呟いて黙って見送った。

「和葉どないしたん？」

友達の声で我に返り、慌てて前に向きなおした。

それから下校になるまで平次は学校に姿を現さんかった。

冬休みに東京に行く話の事とか、少ししときたかったんやけど。

蘭ちゃん達に会うのも久しぶりやし、なにかお土産とかも考えなあかん。

平次はそういう事考えたりせんから、うちがしっかりせな。

ホンマにお姉さん役は大変やわ。

んゝゝゝ仕方ない。

詳しい事は平次が帰って来てからにしよう。

カバンを持って教室を出ようとした時やった。

「和葉ゝ！大変や！沖田様がゝゝ沖田様がアンタを呼んでるでゝ
！」

沖田様？

「泉心高校の沖田総司や！剣道界の貴公子やで！なんか知らんけど和葉に用があるやて！」

息を切らしながら伝えてくれる友達をみて、スゴイ人やって事はよくわかった。

教室の窓辺へと友達に引っ張られて校門の方を見る。

人だかりになっていて全く誰がその人かわかんようになってしまってる。

するとその中の1人が私に気がついて大きく手を振っている。

目を細めてよくうみてみるとゝゝゝ

「！」

あの人！この前平次の居場所を教えてくれた人や！

教室を出て行くうちの事をクラスメートが息を呑んで見守る。

人にぶつかりながらも、急いでその人の所へ走って行った。

なんか・・・女の子達の目線が痛いんやけど。

校門には仰山の人達に囲まれて揉みくちにされている沖田君が
おった。

うちに気がついて周りの人に

「ちょっとゴメンな」

そう言って私の方へと歩み寄った。

「俺は泉心高校の沖田・・・覚えとるかな？遠山和葉さん」

な・・・なに？

「今から時間ある？・・・デートしてほしいんやけどアカンかな？」

えっ・・・と言ってる意味がよう分からのやけど。

すると周りの女の子たちが

「和葉はアカンで。あの服部君と付き合ってるんやから」

「そやそや。公認のカップルやし無駄やと思いますよ」

沖田君は彼女達の話聞いて

「そうなん？」

うちを真っ直ぐと見て聞いてきた。

「・・・付き合っては・・・ない・・・」

ホンマの事やし。

こっいつ時にはっきりと言える関係じゃないし。

うちが俯いて答えると沖田君は頷いて、いきなり私の手を握りしめて歩き出した。

「ちよっ・・・と！」

女の子達の真ん中を横切っていく。

「は・・・離して！うち好きな人がおるから、そやから・・・」

沖田君はさっきと同じ眼差しで

「しつとる。服部やろ？」

「！」

「それでも・・・アンタが好きなんや」

沖田君の黒くて綺麗な瞳がうちを写してる。

「今日は少しでええから、お茶してもらえんやろか？和葉ちゃんを困らせとうはないけど俺も引き返しとうはない。少しだけでええから・・・」

沖田君はなんでうちにそんな事を言うんやろ。

そう思った瞬間

「理由なんかないんや。和葉ちゃんの笑顔をもう一回見とうなった。それだけや」

心を読まれたかと思ってビックリしてしもった。

「あかんかな？」

首を少し傾げてうちをみつめてる。まるで少年のように澄んだ瞳。

「あかんこと・・・ないけど」

そんな瞳で見られたらはっきりと断る事が出来へん。

この人ズルイわ・・・。

「ありがとう！ここまで来たかいたわ。ホンマの事言うとここまで来るのにメチャ勇気がいったんや。ホンマに・・・和葉ちゃんが天使様にみえるわ」

屈託なく笑う沖田君にうちはなんでか照れてしもうた。

天使なんて言われた事ないし・・・。

わざわざ遠いところから会いに来てくれて女の子なら嬉しくないわけない。

でも・・・

「沖田君。この手・・・」

「あっ・・・バレてもうた」

しっかりと繋がれた手。

「どうしてもあかん？」

「どうもこうも、あかんもんはあかん！」

「・・・」

一瞬静かな時が流れる。

大きなため息を吐き、握った手を見つめる沖田君。
そして何か言おうとしたから

「あ・か・ん！」

うちは釘をさした。

すると

「はあゝ降参するわ。和葉ちゃんは意地っ張りやなあ。そこも可愛いんやけど」

「なっ・・・！可愛いとか言わんというて。恥かしいやん！」

「なんで？ホンマの事やのに？」

ニツコリと笑う沖田君の笑顔をみて、何も言い返されへんかった。

どないな対応していいか分からん・・・。

チラッと沖田君をみる。

「今日は手繫いで歩く事は諦めるわ・・・強引はあかん！て朝の占いで言つとたさかい・・・」

渋った顔でそんな事言うてる。

なんか・・・子供のようにで憎めん。

そして手を離して歩き出す。

距離をうちの歩幅で歩いてくれる。

「和葉ちゃん何処に行きたいとことかない？」

「じゃ、マクドでも行く？」

「じゃあ、マクドにするか！」

「やっぱりスタバは？」

「スタバもええなあ！」

「沖田君は何処に行きたいところないん？」

即答で

「俺は和葉ちゃんと一緒なら何処でも・・・そやから決めてくれてええよ」

「・・・」

結局・・・スタバでお茶して話して・・・。

別れ間に

「最初は友達でええから。何かあったらメールでも電話でも気軽に連絡して」

そう言つてメモを渡された。

沖田君。思った以上にスゴイええ人やつた。

うちのペースにすべて合わせてくれて申し訳ないくらいや。

「あんな人もおるんやな」

クスツと笑つて家路へと急いだ。

その時メールが入った

『どこにおるんや？』

平次だ！

急いで電話する。

「もしもし平次？もうええの？」

『おう。それよりお前どこにおんねん。学校終わったん今日は早かったやろ？』

「友達が出来てスタバにおってん」

『・・・そうなんや。とりあえずはよ俺の家に来て飯にしようや。

遠山のおっちゃん遅くなるよってオバハンが和葉の分も用意しとるさかい』

「ホンマ？急いでいくわ」

うちはそのまま平次の家へと向かった。

F r i e n d s 3 和葉サイド 沖田参上 (後書き)

誰かを好きになるっていいですね。

F r i e n d s 4 和葉サイド〜ZEROになる日〜 (前書き)

Friends 4 和葉サイド＼ZEROになる日＼

平次の家に着くとオバチャンが食事を作っている最中だった。

平次が台所で何かを摘まみながら素っ気無く

「なんや。来たんか」

第一声がそれやった。

「平次が来い言うたんやんか！」

それを聞いたオバチャンが

「あんたが和葉ちゃんが一人やから呼ぶ言うたんやろ。なんやろなこの子は・・・」

すると平次が顔を真っ赤にして

「ちゃうで和葉。遠山のおっちゃんに頼まれて仕方なくや。勘違いすんなよ」

そんな平次にオバチャンが

「素直やないねえ・・・。そんな事言うてて和葉ちゃん他の人に取られてしもうても知らんで」

平次は笑いながら

「ありえへん。こんなじゃじゃ馬に誰も惚れへんて！なあ和葉？」

うちのポニーテールを軽く引っ張った。

「ちよっ・・・やめてーや」

手を払いのけると

「凶暴な女やなあ。こんなん絶対彼氏できへんで」

平次はあきれた様のため息をついてみせた。

その態度になんやカチンときてしもうて
「オバチャン。うち今日・・・デートやってん」
って思わず言っけしもうた。

あれ？2人が硬直しとる・・・。

オバチャンが先に口を開いた。

「ホンマに？」

「・・・」

「どんな人なん？」

「ええ人やったで。誰かさんとはえろっ違って」

それまで黙っていた平次が

「俺部屋で待つてゐるから・・・飯出来たらよんでくれ」
いきなり立ち上がって自分の部屋へと戻った。
慌ててうちも平次の後を追いかける。

「平次！どないしたん？なあ！」

平次の部屋のドアを叩く。

「平次ってば！」

すると扉がいきなり開いて平次がうちの腕を引っ張った。

「そんで・・・」

「？」

「デート楽しかったんか？」

目の前に平次の顔がある。

「どうなんや」

「・・・デートちゃうよ。ホンマに友達が出来て遊んでたんや」

「・・・誰や。その友達って」

平次の顔が怖い。

「・・・沖田君っていう泉心高校の男の子や。でも友達やで？なんで怒るん？」

平次の瞳の中に何かが曇った。

「泉心の沖田・・・」

平次は黙ってしまった。

「平次・・・腕痛い」

「・・・」

「平次・・・」

「ああ、すまん」

やっと掴んでいた腕を離してくれた。

2人の間に気まずい雰囲気が出る。

もしかして・・・平次

「ヤキモチやいてくれてるん？」

平次が慌てたように顔をおもいきり背けて、

「アホ！誰がなんなんや！あれや・・・ほれ・・・」
しどろもどろになる。

うちは期待の瞳で平次をみつめる。

平次が横目でチラッとうちをみて・・・目を逸らした。

そしてわざとらしゅう手を叩き、

「そーや！あれやな和葉！腹減ったなあ！もう飯出来たんか俺みてくるわ！」

そう言つて台所へ行ってしもうた。

なんやの。

なにがあれやの。

・・・期待したうちがバカやったわ。

こんな時にご飯の方が大事なん？

ありえへん。

「和葉！飯出来たつて。はよ来いよ」

平次。

うち決めたわ。

「今行くわ」

平次との関係をハッキリさせてサッパリしたい。

いつまでも振り回されて泣かされてたらあかん。

平次の横に座り

「オバチャン。ご飯おかわりしてもええ？」
隣を睨みながらご飯を食べる。

「ご馳走様でした。オバチャンご飯ありがと。うち帰ります」
サッサと身支度をして服部家を後にする。

「ちょー待て。和葉、送ってくから」
平次が追いかけてくる。

「別にええよ。すぐそこやし」
平次の声を無視して歩き始める。

「なんやねん。待ていうとるやろ！」

うちは服部家から50m位離れた所で足を止めた。

「あゝ寒。なんや急に止まって。腹でも痛いんか。なにか変なもん
食ったんやろ」

平次が横で笑っている。

「もう、いい加減限界やわー」

「うちらってなんなん？ただの幼馴染？それともあんたが親分であ
ちは子分なん？」

平次が立ち尽くす。

「なあ・・・平次答えて」

「急に何言つとんねん。そんなんどうでもええ・・・」

「どうでもええことない！・・・はっきりゆつて」

あかん泣きそうや。

感情が抑えられん。

「お願い・・・平次」

「お前は大事な・・・幼馴染や」

心の中の何かが・・・割れる音がした。
それと同時に周りの音も聞こえなくなった。

静かな終わりが今訪れた。

「・・・これからは・・・友達としてお願いします」
うちは大きく頭を下げて平次に背を向け家へと急ごうとした。

「和葉！」
平次が叫ぶ。

うちは大きく息をはいて笑顔を作って振り向いた。
「幼馴染は今日で終わりや・・・今までありがとう。もう・・・か
まわんといてな」
「なに言うてんねん・・・おい和葉！」

その時うちの携帯が鳴った。
あっ・・・沖田君からや。

「もしもし・・・うん。今日はありがとう。・・・・・・・・ええよ。
来週の日曜やね。うんじゃあ」

携帯を閉じて
「沖田君から・・・そういう事やから来週は一人で東京にいつてな」
振り向かずに平次に告げた。

「なにがや・・・なにがそういう事や！」
うちはまた歩き出した。

「和葉！俺にどうしてほしいねん！」

そんなん自分で考えてよ。

「言いたい事あるなら言えや！」

あんたからやないと意味がない！

うちはいつの間にか走り出した。

もう平次の声を聞きたくない。

うちの心には温度差がありすぎる。

友達でええ。

幼馴染なんて辛いだけやもん。

いままで頑張ってこれた事が嘘のようや。
こんな簡単に終わってしまう。

幼馴染なんて

「最悪や」

涙が後から後から溢れてくる。

家に明かりが点いていた。

おとうちゃん帰ってきたんや・・・。

泣き顔みせたら心配してしまうやろな。

どないしよう。

何処にも行くところあらへん。

涙がポロポロとこぼれてきた。

「泣いたら・・・あかん」

「・・・電話の声。元気ないから心配したら・・・やっぱり」

背後より男の子の声が突然した。

「沖田君・・・なんで？」

「市内の親戚の家に今日は泊まってな。なんか和葉ちゃんが泣いてる様な気がしてコイツで飛ばしてきたところや」

指をさしたその先にはシルバーのバイクがとまっていた。

沖田君もバイクに乗ってるんやな・・・。

平次と一緒に・・・。

平次と・・・。

「なんかあつたら連絡してって言うたのに・・・。ほんまに意地っ張りやな」

ゆつくりと歩いてきて優しく抱きしめた。

「ウツ・・・ヒック・・・ッフ・・・」

頭をゆつくりと撫でて

「理由は・・・わからし聞かんから、思いきり泣いてええよ」

そして言葉に甘えて思いつきり泣いた。

普通引いてしまう位の泣きっぷりやった。

何時間泣いたんやろう・・・。

その間、ずっと沖田君がそばに居てくれた。

「・・・ありがとう。・・・見られたんが沖田君でよかったわ」

「俺も・・・泣いてくれたんが俺の胸でよかったわ」

何もかも包み込むようなその笑顔にうちも笑顔で返した。

「一人で泣いたらあかんで？必ず俺の事呼んでな」
うちは頷いた。

それに納得した様に沖田君はバイクのメットをかぶった。

沖田君は軽く手を挙げて、バイクのマフラーを2回吹かして去っていった。

家に帰るとリビングのソファで眠っているお父ちゃんにそっと毛布かけて自分の部屋へと静かに向かった。

ベットに入って眠りについたのは意外と早かった。
シヨックできつと寝られへんと思ってたんやけど。

・・・沖田君のおかげかもしれん。

そして夢を見た。

小さい頃の平次が遠くからうちの事をみつめてる不思議な夢。

あの頃、うちは平次のお嫁さんになりたかったんよ。

もう・・・かなわん夢やけどね。

F r i e n d s 4 和葉サイド＼ZEROになる日＼（後書き）

m i c k y 〓 こんなはずでは・・・。

和葉「うちは振られたん？振ったん？」

平次「俺の話を聞いてくれ！」

沖田「まつ・・・ええんちゃう？」

F r i e n d s 5 平次サイドくどないしよう (前書き)

短い文章になってしまいましたが続きを書いてみました。

更新は時間をみつけて随時行います。

F r i e n d s 5 平次サイドくどないしよう

なんやねん…。

和葉は俺に何を言わせたいんや？

幼馴染みは幼馴染みやろ？

急にやめる言つて、はいそうですかってなる訳ないやろが。

「……そついや前にも似た様なことがあつたなあ……」

あれは三年位前になるやろか…。

当時、俺に付きまどつた女が一人おつたんや。顔もまあまあ可愛い方で、まんざら嫌な気もせいへんから別に放っておいたんや。そやけど、その女…。

俺の事である事ない事と和葉に言いよつたらしい。そんな日の放課後やった。

「和葉。帰んぞ。はよ仕度せい」

いつも通りに俺が声をかけたら、アイツ悲しそうな顔して

「もう…平次とは帰られへん。幼馴染みや言つて一緒におつたら…
彼女が可哀想やろ？」

俺の目を全く見ずに下を向いてそんな事を言つた。

「何つまらん事言つとんねん。はよ行くで」

和葉の手を引っ張ろうと伸ばした俺の手を……思いきり払われた。

「つまらん事で何がなん？うちどうしたらええの？このまま平次とあの彼女と3人で仲ようなんてそんな惨めな事できへん！もう、幼馴染もやめる！！」

泣きながら教室を出て行く和葉を俺は呆然と見送った。

だってそやる？

和葉が言った彼女は誰の事を指しているかはすぐにピンときた。
実際関係ないにしても・・・や。

なんで、彼女が出来たらお前との幼馴染が終わりやねん。

今まで2人で仲ようやってきたやんけ。

なあ・・・和葉・・・。

お前ほど言いやすい女は他におらん。

お前ほど食い意地張ってる女はおらん。

お前ほど人の部屋に勝手に入ってきて寝てしまう奴もおらん。

つまり・・・うまく言えんけど・・・和葉は俺の中で一番の女やいう事。

恋とか愛とか・・・今はよう分からんけど・・・。

大事な・・・幼馴染や。

誤解が解けたんはすぐやったけど・・・なんや・・・怖かった事はよう覚えとる。

和葉が俺の手を振り払ったあの時。

とても大切なもんが壊れたような気がして・・・怖かったんや。

それからすぐに自分の周りには女を寄せ付けんようにした。

和葉がそれで気が済むなら・・・そんなくらの事でええなら。

俺の周りには和葉が一人おれば充分やった。

もしも俺に誰か好きな奴が出来たとしても・・・和葉とは一緒にいたい。

勝手やな・・・。

あの頃から俺は何も変わってない。

踏み出す事も逃げる事もせずに、今の現状を守るのに必死やった。

多分、和葉のあの言葉

ーうちらってなんなん？ー

あの言葉は俺が一番恐れていた言葉。

すべてを壊して和葉が去っていつてしまうその言葉を・・・俺は今聞いてしまったんや。

俺には言えん。

和葉が待っているその一言をずっと避けてきた俺には・・・今さら無理やって。

かと言って和葉が他の男と仲ようしてるのを見るのも無性に腹が立つんや。

俺・・・どないしたらええんや・・・。

Friends 5 平次サイドくどないしよう (後書き)

m i c k y 過去の女・・・ねえ・・・。

平次「なんやねん。勘違いしたんは和葉やで」

和葉「だって！あの時はホンマに平次とその子が付き合う事になったってその子言ってきたんやもん！」

沖田「だから俺にしときって」

平次「・・・沖田。昔の話や」

沖田「（無視）和葉ちゃん。次回は服部サイドの話やで。出番ないし遊びにいかへん？」

和葉「そやね。平次は昔話にひたってたらええねん」

平次「ちょ・・・！待てや！・・・あつ・・・行ってもうた」

m i c k y「プッ」

平次（怒）

F r i e n d s 6 平次サイド〜一触即発〜（前書き）

今回書いててちょっと悩んでいますのでお休みをさせて下さい。近いうちにまた不定期に更新させていただきます。

いつも読んで頂いている皆様。

こんな私ですが今年もよろしくお願いいたします！

Friends 6 平次サイド〜一触即発〜

それから3日経ったが和葉の姿をあれから一度も見えてへん。

部屋の壁に寄りかかって、何をするでもなくただ時間だけが過ぎていった。

バイク雑誌をパラパラとめくっていると携帯がいきなり鳴った。着信画面に目をやると工藤の名前があった。

そっぴや冬休みに東京に行く予定にしてたんや。

アカン・・・どないしよう。

一人で行ったら変に思うやろか。

『服部か?』

「おお・・・なんや? 東京へは明後日に行くつもりやで?」

『・・・一人でか?』

こいつ・・・なんか知つとんな。

「そうや。なんか文句でもあんのか?」

『ふーん。そうか・・・。大変そうだな』

いったい何処まで知つとるんや・・・。

「和葉とはいつも一緒な訳ないで。あんなんおらんでも東京には行くさかい、ちゃんと部屋用意しといてや」

『ああ。蘭がはりきって掃除して待つてるけど・・・。お前が一人

で来ても蘭がなあ・・・」

なんやねん。俺は和葉のオマケか！

「・・・別に遊びに行くだけが目的じゃないしええやんけ」

そや。この前、俺の事件で関わってた犯人の事をちよつとばかり聞きに行きたかったんや。

本来それが目的やったのに、いつの間にか4人で遊びに行く話ばかりアイツとしよった。

俺は部屋の隅にあった東京の旅行雑誌に目をやった。

俺の横で和葉が本を広げて

「ここメツチャおいしんやて！」

とかようはしゃいどったわ。

またなんか騒いどるなあゝくらいにしか思わんかったけど・・・。

なんや・・・おらんと静か過ぎて落ち着かん。

和葉・・・何でそこにおらんのや・・・。

「・・・っで。服部？聞いてるか？」

「おお・・・。なんやったけ？」

「まあいいや。じゃあ気をつけてこいよ。一応だけど、もうひとつ部屋を用意してやるから」

「いらん。一つでええって・・・ホンマにもうええねん」

「なんで蘭がお前の部屋だけ用意してなきゃいけねーんだよ。絶対連れて来いよ」

なんやねん。

「ほな切るで」

『ちよつと待て！・・・こつちで蘭が待ってるからギリギリまで頑張つてこいよ。それでダメなら・・・しょうがね・・・一人でこい』

余計なお世話や！

頑張るもなにもどうせいちゅうんじゃ！

電話を切ったあと、和葉が読んでた本を手を取った。

いたるところに赤マルが書き込まれて、和葉がどれだけ楽しみとったんかがようわかった。

読み進めると

「ん？なんや？」

ーいつか平次と行ってみたいところー

和葉の字で小さく書かれていた。

記事には恋人同士で行くデートスポットが書かれていた。

夜景の綺麗な写真の中には楽しそうに恋人同士が寄り添っていた。

この雑誌は和葉の私物で俺が読むことはまずなかった。

小さく書かれたその文字に和葉の想いや願いが込められているよう

な気がした。

「ありえへんで……。こんな……。」

俺は急いで服を着替えて家を出た。

和葉に会わなあかん。

そんで、言わなあかん。

息をきらしながら和葉の家まで走った。

アイツの家まで走るなんて小さい頃以来や。

いつもゆっくりと2人で歩いとったこの道に俺は慣れてしまっていたんやな。

遠山の家の近くで俺は……。隠れてしまった。

和葉と沖田や。

なに楽しそうに笑ってんねん。

「じゃあ、送ってくれてありがとう。荷物まで持ってもらって助かったわ」

「ええて。じゃ・・・また会ってな？」

和葉は顔を真っ赤にして・・・頷いた。

なんで俺はこんなところで隠れとんねん。

「それと・・・」

沖田はそう言って和葉に近づいて抱きしめた・・・。

「ちょっと！沖田君・・・なに・・・」

和葉が何か言ってその耳元で沖田がなんか囁いてる。

和葉が急に大人しくなって・・・静かに顔を上げて沖田に顔をちかづけた。

「アカン！和葉！」

思わず俺は2人の前に飛び出してしまった。

「平次！」

「・・・」

和葉の顔が青ざめている。

そして逃げるように家へと入ってしまった。

「和葉！待てって！！」

なんで逃げるんや。

「ええとこ邪魔されたわ。幼馴染の服部君に・・・」

沖田の声に俺は我を忘れてしまった。

「和葉になにしとんねん！」

「何って・・・なんもしてへんで。これからやるところやったんや」
「悪びれる事ないその言葉に思わず沖田を殴った。」

「痛いなあ・・・口の中が切れてしもうたわ」

そう言うと同時に沖田が俺を殴り返した。

そして俺に向かつて真っ直ぐ指を指して

「お前のはつきりせん態度が気に入らん。真剣な剣道の試合でも事件があれば簡単に棄権する。和葉ちゃんには悲しむような事ばかり言う。そんな事ではなんも勝負はつかんで？まあ・・・俺はお前には負ける気はせえへんけどな」

「そうか・・・なら俺と勝負しろや。沖田」

「なんの勝負や？」

沖田が腕を組んで壁に寄りかかった。

「なんでもええ！」

俺が叫ぶと同時に・・・沖田が笑いよった。

「目的のない勝負は無意味や。はつきりと言ってくれば受けてもええ。・・・お前にはつきりといえる勇気があつたらやけど」
悪魔のような笑顔に思わず声が出ない。

「沖田・・・お前和葉の事本気なんか？」

沖田は背を向けてゆつくりと歩き出した。

「本気出したいんやけどなあ。俺、今日も占いで『相手を思いやつてあげてね』って言われてしもつて・・・。タイミングが掴めんのや。困った話や」

「・・・・・・・・」

そして振り向いた沖田の顔からは笑顔が消えて

「本気だしてもええか？」

背筋に冷たい汗が流れる。

もう後には引けん。

逃げる事も戻る事も・・・。

俺も覚悟決めなアカンな。

いつもあいつを待たせてしもつたから・・・腹くくらせてもらっわ。

「和葉は・・・俺の女や」

その一言で沖田は納得したように頷いて

「ほな・・・今日は帰るわ。楽しみにしとるさかい。頑張りや」
手をヒラヒラさせて去って行った。

「和葉」

和葉の部屋の明かりはつかないままだったが、そこにいる事はわか
つとる。

「幼馴染は・・・終わりや」

聞こえないだろうけど一応言っとくから。

そして俺は大きな声で

「明後日に東京行く時はお前も一緒やで！」

それだけ言うと俺は遠山家から離れて歩き出した。

友達俺には無理や。

悪いな和葉・・・終わりにには絶対にさせへんからな。

覚悟しとけや。

Friends 6 平次サイド〜一触即発〜（後書き）

micky「どうでした？」

和葉「平次は勝手な男やわ」

沖田「ほんまや〜ほんまや〜。和葉ちゃんもつと言ってやり」

平次「俺よりmickyの方が勝手やで。はよ先を書けや。工藤たちも待つとるで」

micky「・・・」

和葉「なんでそんな事を言うん！可哀想やんか。平次そいうところがアカンねん」

沖田「そうやなあ〜俺も心底思っわ〜」

平次「なんでいつも俺が悪者になんねん！」

micky「プツ・・・」

平次「そいつよこせ！おろしたる！！」

和葉「アカン！平次！」

沖田「次回は少し待っててなあ。今年もよろしゅうお願いします」

F r i e n d s 7 沖田サイドだってオレは・・・(前書き)

F r i e n d s 6 の話の後に読んで頂ければ話しがつながるかと思っています。

そんなに話が進んでいませんが目をつむって読んで下さい(？)
では今回は沖田サイドです。

時間が空いたらまた投稿します。

F r i e n d s 7 沖田サイドゝだってオレは・・・ゝ

服部が啖呵をきる2時間くらい前の事。

街を歩いていたら急に雨が降ってきよった。

仕方なしに近くの本屋に入って雨宿りしとつてん。

「おっ！マジック快斗の新連載やゝ」

駅前の本屋で立ち読みし始めようとしたそんな時・・・和葉ちゃんが向かいの店にあるのがガラス越しにみえてん。

なにウロウロしてるんやろう？

お土産みたいなん選んでるみたいやけど、どこか旅行でも行くんやるか？

オレに気がついてないみたいやなあ・・・。

でもなあゝ。

ここでオレが声をかけたらホンマにストーカーと思われるかも知れへんしなあ・・・。

でも、声かけたいなあ・・・。

ああゝどないしよう・・・。

そんなん考えて頭抱えてたら、タチの悪そゝな男2人が彼女に話しかけてきてな

「一人ならあそぼゝや」

「俺らもヒマやねん。な？あそこに車あるからドライブでも行こうや」

と嫌がる彼女の手を引っ張って連れてこうとしてるねん。

「離して！いやや！・・・・・・・・平次！」

「！」

オレは優しいなあ・・・。

他の男の名前呼んでんのに・・・。

俺はすぐに彼女の所に行き腕を掴んだ。

「沖田君！」

「なんやねんお前！小僧は引っ込んでろ！」
ホンマけつたいな奴らなあ。

「この人オレの女になる人やねん。手加減は・・・いらんな？」
オレは傘を右肩に乗せ・・・構えた。

「・・・その構えは・・・沖田・・・！！」

へえ・・・・・・・・。もしかしてこいつらも剣道やつとんのか？

彼女を引っぱり、自分の後ろへと隠した。

少し怯えて心配そうにしている彼女に

「大丈夫やて。なんもせえへんって・・・多分」

そして前を見るとそいつらは居なくなっていた・・・。

「あり？」

そんな感じで和葉ちゃんと雨がやんだ街を歩く事になってん。

ホンマにラッキーやわ。

「沖田君。剣道いくつの時からやってるん？」

和葉ちゃんが横からオレの顔を覗きこむ。

「小さい頃・・・物心ついた時にはもう竹刀ブオンブオン振り回してたわ。で、和葉ちゃんはいつからそんなにかわいいん？」

背中を思いつきり叩かれて

「沖田君はホンマにお世辞が上手やわあ。メチャ男前やし優しいし剣道も強いし・・・なんで彼女がおらんの？」

「・・・そんな男前やのになんで付き合ってもらえんの？」

聞き返したら・・・なんやメチャ笑われてしもうた。

オレ・・・いつでも本気やのに・・・。

・・・まあええわ。

「ところでなんでそんな荷物が多いん？旅行かどつか行くん？」

あれ？下向いてしもうた。

「・・・ほんまは平次と東京の友達のと所に行くつもりやったけど。

もう、平次とは一緒にいかれへんねん」

「・・・何かあつたん？」

「はつきりと『幼馴染』って言われてしもうたわ」

「！」

彼女の目にうつすら涙が溜まっていた。

いつもキラキラした瞳も・・・真っ赤つかや。

「服部もアホやなあゝ。こんな可愛い子にそんな事言いよつて。知らんでほんまに・・・でも、その荷物は？一緒に行かんのやる？」

軽く涙を拭って、

「これな・・・。一応東京に行くときに、蘭ちゃん達に渡してもらおう思うて・・・。いつもお世話になつてるのに平次は手ぶらで行く事が多いから、用意だけでもしとかな・・・。うちは平次のお姉さん役やし、あんな事言つても・・・。やつぱり一緒におった時間が長かったから簡単に離れられへん・・・。友達も失格やわ」

悲しそうに笑う彼女に合わせオレも笑った。

さっき・・・無意識に服部に助けを求めた事、和葉ちゃんは気がついてるんやろか？

「和葉ちゃんは・・・意地っ張りやからなあ」

別にええねん。

和葉ちゃんが幸せならそれで。

だってオレは・・・。

家まで送ると服部が隠れてこっちを見ているのに気がついた。

なに今頃きとんねん。

メツチャ腹たつな。

そや！

「和葉ちゃん、ちょっと耳かして」

彼女の耳元で

「今日は和葉ちゃんと運命の出会いができてラッキーやったわ。それと・・・オレはストーカーちゃうから安心してな」

「（笑）何言ってるん。助けてもらって沖田君はうちのヒーローやで？」

服部の不機嫌オーラが出まくつとる。

とどめや・・・。

「和葉ちゃん。昼間目が赤かったけど大丈夫？お父はん心配すんで？ちょっと見せてみ」

和葉ちゃんが頷いてオレの方を見上げた。
ハア・・・可愛いらしいな・・・。

アカン！ちゃうって！

角度からやとこうした方が・・・

「和葉！」

ほらひっかかりよった。

和葉ちゃんは家の中に入って行った・・・っていうかオレが軽く家のほうへ押したんやけど。

そんなこんなで

「勝負しろ！」

とかぬかしよるし・・・勝負も何もお前の勝ちに決まっとるやん・・・
・ホンマにコイツ腹立つわ〜。

和葉ちゃんはお前の事が今でも好きなんやで！って死んでも言わんからな・・・。

世の中そんなに甘くないんや・・・服部。

お前ははっきり自分の気持ちを言わなあかん。
心の中だけではアカンときもあんねん。

もう分かってるんやろ？

ほら言うてみい。

ほれ早う！

なにか決心したような顔でコイツ言いよった。

「和葉は・・・俺の女や」

ほあ・・・まあよう言ったな。一応褒めてやるわ。

なんかこのままええ感じになるかも知れへんなあ・・・。

和葉ちゃんも自分の部屋から心配そうにこつちをみとるし。

「ほな・・・今日は帰るわ。楽しみにしとるさかい。頑張りや」

まあ・・・百万が一、お前が上手くいかんかったら和葉ちゃんは遠慮せずこのオレが譲ってもらうさかい・・・。

気い抜くんやないで、服部。

F r i e n d s 7 沖田サイドゝだってオレは．．．（後書き）

沖田「百万が一つて．．．絶望的な数字やなあ」

m i c k y「応援してるから頑張つて！」

平次「沖田．．．お前ええ奴なんやな」

和葉「平次と違って優しいねん。な？」

沖田「それはちゃうで。オレは和葉ちゃんやから優しくしとんのや。

服部はどうでもええ」

平次「はあ！さよけ」

m i c k y「．．．ほんとどうでもいい．．．」

平次「このゝアゝマ！大阪湾に沈めたる！和葉ロープ持って来い

！．．．あれ、和葉？」

和葉「うちはどうなってしまうんやろ？明後日平次と東京に行く事になるんやろか？次回は和葉サイドです」

F r i e n d s 8 和葉サイドㄱ届かない声ㄱ（前書き）

さてここまでやっと書きました。

正直・・・5話くらいで終わるかと思っ
てました（爆）
さて今回は和葉サイドの話です。

Friends 8 和葉サイドへ届かない声へ

「明後日に東京行く時はお前も一緒やで！」

平次がこっちをみてる。

アタシはカーテンの陰に隠れてそつと外をみていた。

そんな大きな声出さんでも聞こえてるのに……。

そら、うちかて東京行きたい。蘭ちゃんにだって会いたいもん。

そやけどもういい加減幼馴染として行動するのが疲れてしもってん。

平次に振り回されて……拳句に『大事な幼馴染』やて。

ホンマになんであんなに鈍感なんやろ。

うちメチャクチャ意思表示してたやんなあ？

平次はアタシの気持ちに気づいてない……というか上手くはぐらかされていたというか。

そやのに今になって東京に誘ってくれるんやな。

いつもはアタシから「一緒に行く！」いうてついて行ってたのに。

何で？

幼馴染やないのに・・・。
友達やのに・・・。

一緒にいたいと思ってくれてるん？

「平次はうちの事をちよつとは気にしてくれてるんやろか？」
そんな期待を何度も裏切られたせいで、もう心はボロボロやわ。
それでも繰り返し願ってしまう。

「うち重症かもしれんわ・・・平次」

左手の中に大事なお守りを握って、窓辺から星が輝く夜空を見上げた。

平次はあのお星さんのようや。

見てるとキラキラして惹かれてしまっけど、届きそうで絶対に手が届かない。

思わず夜空に手を伸ばしてみる。

「ホンマに届きそうやのに・・・」

帰っていく平次の背中を眺めて、空に伸ばした手をゆっくりと下に降ろした。

pppppp

「沖田君からや」

メールを開くと

『和葉ちゃんもう寝てた？寝てたらごめんなあ……。帰る途中で空見上げたら星が綺麗で思わずメールしてしもたわ。もし起きてるんなら……。空みてみ？メチャ綺麗で和葉ちゃんの悩みも軽くなるかもしれへんで。じゃ、おやすみ。あと布団はちゃんとかけて寝るんやで（笑）」

今、見てるよ。

沖田君はホンマにええ人や。

いつそ沖田君を好きになればよかったのに。

pppppp

「……。平次」

『話があるから明日ちょっと俺に時間くれ。朝6時にオマエの家の前で待つてるから』

以前は平次からメールが着たらすごく嬉しかったのに、今はなんか苦しいだけやわ。

「会いたくない」

メールを送ろうとしたが送信を解除した。

「わかった。待ってる」
それだけ送った。

何を今さら言うんか知らんけど、平次に会いたい気持ちは前と変わらないから会って確かめるわ。そやないと・・・友達にもなれん。

友達でええから、会いたいんやもん。

けど、平次は朝6時になっても家の前には来なかった。

心配になって平次の家に電話かけると事件で夜中から出かけてるらしい。

受話器をおいた後に

「こんな平次らしいわ・・・。会いたいと思うこともあかんの？」
涙がとめどなく後から溢れてきてとめられへん。

その時バイクの音がした。

平次？

アタシは玄関のドアを急いで開けた。

「沖田君・・・なんで？」

沖田君は頬をかきながら

「いやゝ道に迷うてもうて・・・気がついたらここにおってん。なんでやる？これがいわゆる神様のいたずら・・・なんて・・・昨日アイツ来てたやる？上手くいったんかな？と思ったら目が冴えてしもうてな。最後に一目和葉ちゃんの姿を見にきたんや・・・聞きとくないけど、どうやった？」

バイクから降りてそばにやってきた。

アタシの顔をみて

「なんや！今度は何があつてん！・・・泣くな。泣いたらオレも悲しくなるやん。ちょっと・・・・・・カンニンな？」

そういつて抱きしめられた。

でもこの前の優しい感じよりも少し力が強い感じがする。

気のせい？

「だから・・・オレにしとき言うてんのに・・・泣かせたり一人には絶対せえへんし約束は必ず守る。絶対に上手くいくって・・・」

そうか・・・そうやね・・・。

そやけど。

「沖田君……うち……」

平次の事で頭がいっぱいやのに、沖田君と付き合うなんて出来きへん。

そうつしたいけど・・・優しい沖田君に甘えたいけど・・・

「ダメなん？・・・・・・・・・・和葉ちゃんは今ホンマ意地っ張りやなあ」

顔をあげると、太陽のように優しい笑顔。

「うち……なんで沖田君と……ゴメンな」

「ええて」

「ホンマに……ゴメン」

最後は涙で声にはならなかった。

「・・・そやったら今日一日オレの彼女になってくれへん？そしたらオレも身を引くわ」

気を持たせる態度をさせてたんは平次だけやない。

アタシも一緒やったんや。

「うん……ええよ。着替えてくるから少し待っててくれる？」

沖田君は手をあげて笑いながら

「なんぼでも待つてるさかい……さらに可愛くしてきてな？」

今日は沖田君とデートして平次の事は忘れるわ。

そやないと・・・今は一人にはなりたくない。

沖田君はホンマに優しい。

そんなアタシの気持ちも分かってくれているんやから。

「本物のヒーローみたいやわ」

鏡をみて笑顔を作り

「よし！大丈夫！」

再び沖田君のもとに行く。

バイクにもたれていた沖田君が気がついて立ち上がった。

「・・・やっぱりかわいいなあー！オレが今日はしっかりエスコートさせてもらうからしっかり捕まってるな！」

バイクのマフラーを吹かして走り出す。

スピードをアタシに合わせて最初からゆっくりと走ってくれているのがわかる。

「ありがとう」

沖田君の背中にそう呟いた。

緑色のバイクとすれ違った時、私は沖田君の背中で風を感じて目を閉じていた。

平次の声は・・・アタシには届いていなかった。

F r i e n d s 8 和葉サイドへ届かない声へ（後書き）

和葉「平次最低……」

沖田「服部最悪……」

平次「仕方ないやろ！事件や、時間通りに終わらへんわ！」

m i c k y「言い訳？見苦しい……」

平次「おゝまゝえゝこゝろすう！」

和葉「平次が悪い。m i c k yは悪くない！」

平次「ウツ……」

沖田「そやんなゝ服部が全部悪いわあ」

m i c k y「いいの。全部私が悪いの（涙）」

平次「そや！お前が全部悪いんや。なあ和葉？」

和葉・沖田「……」

平次「えっと……次回は俺サイドらしいです」

F r i e n d s 9 平次サイド 自己嫌悪 (前書き)

平次サイド2話続けます。

今回少し・・・いやかなり文章がおかしいかもしれません。最初に誤るときます。

F r i e n d s 9 平次サイドへ自己嫌悪へ

・・・・・・・・・・えらいことになった。

約束の時間を2時間も遅れてしもうつるやんけ。

和葉怒ってるやろか・・・。

誤ったら許してくれるんやろか？

泣いていたら・・・なんて言えばええんやろ。

なんにしても、はよ行って俺の今の気持ち伝えなな。

気持ちが焦りだし、バイクのハンドルを持つ手にも力が入る。
そやのに気持ちが焦ってる時に限って、赤信号に何度もつかまるも
んや。

「最悪や・・・」

イライラしながら青信号に変わるのを待っている。
なんでこっち側はこんなに混んでんねん。

フツと対向車線の車の流れに目でやると、遠くからこっちに向かっ
てくるバイクとすれ違った。

目で追ったその時・・・心臓が止まるかと思った。

「沖田・・・・・・・・えっ！・・・和・・・葉」

なんでアイツの後ろに和葉が・・・。

「和葉！！！」

俺はメットを被ったまま思い切り叫んだ。

だが、朝の通勤ラッシュの車達が俺の叫ぶ声をかき消した。

沖田は俺の事が判ったみたいで、鋭い目つきでこっちをみていた。そして俺の横を走る時、まるで和葉をわざと見せるかのようにゆっくりと走り・・・そしてスピードを上げて去っていった。

急いでUターンをしようとしたが、車に阻まれて上手く出来ない。

「アカン！行くな和葉！」

確かに沖田がこっちをみてた。
そして睨んでいた・・・理由はただ一つ。

また俺は和葉を泣かしてしもうたちゅう事やる・・・？

「クソッ！なんでいつもこうなんねん！」
ヘルメットを地面へ叩きつけた。

もう姿は見えない。

和葉は俺の姿にも気がついていなかった。

「どこにいったんや和葉・・・？」

慌てて違う道を選んで和葉を追いかけようとした時、パトカーが近くでとまって大滝はんが降りてきた。

なにか事件があつたんやろか・・・。

俺はバイクを歩道の脇において現場に近づいた。

「なんや平ちゃん。もう匂いをかぎつけたんか？ちゃんと寝なあかんで」

「そんなん後でもええって。これ・・・って事件なんか？」

「ああ・・・強盗や。そやけどもう犯人は捕まえて署におるさかい、あと処理みたいなもんや」

速やかに事件が解決したみたいで、すっきりした様な顔で話をしている。

「なんや。犯人は捕まっとんのかいな？パトカー乗り回して税金の無駄使い言われるで。ほな頑張つてなあ」

俺がバイクに戻るうとすると

「ハハ・・・オヤジさんとそっくりな事言つて・・・ん？なんや。今日は和葉ちゃんと一緒やないんか？」

「あつゝ！」

そやった！思わずパトカーを見たら無意識に近づいてしもつてた。

「俺・・・最悪やな・・・そら和葉もあいそつかすに決まってるわ」

和葉の居場所もわからんし、探すとしても検討もつかん。
ましてや和葉を追いかける事も一瞬忘れてしまっていた。
いろんな意味で八方塞がりや……。

思わず頭を抱えて地面に屈みこんだ。

「ど、どないしたんや平ちゃん？」

今は話かけんといってくれ……自己嫌悪の真っ最中や……。

p p p p p p

「こんな時に誰からや……工藤？」

なんや。この忙しい時に。

「俺や」

「なにやってんだよ……」

「なにがや！こっちは今大変な思いして……」

『オメー明日本当に一人で来る気にいるのか？』

「そうや言ってるやろ！いちいちそんな事で電話寄こすなや！」

『へえ……本当にまだ仲直りしてねえみたいだな』

ほつとけ！……ん？

「工藤……なんで和葉の事しつとんのや？」

『蘭からの情報だよ。すべて聞かされてるからな……俺だつてオ
メーにこんな電話なんかかけたくねーけどさ。蘭にお願いしたら・
・・なあ？』

おお！そうかそうか。和葉とあのねえちゃん仲がええもんなあ。そ

やから工藤も知ってるちゅうわけや！

『和葉ちゃん今京都に向かってるらしいぞ』

「！」

『新一ちよつと変わって！！服部君！沖田君は確かにいい人だし顔もいい方だと思うし素直だし』

ステキな人だとは思うけど．．．．．和葉ちゃんはそれでも服部君が好きなんだよ。お願いだから和葉ちゃんを掴まえててあげて！．．．．．あれ？新一？何怒ってるの？．．．．．沖田君の事？．．．．．1度会ったことがあるから．．．．．えっ？ちよつと．．．．．ごめんね服部君！電話切るね！」

なんやなんや？

取り合えず京都にいるちゅう事は判ったけど、どこに行ったかが問題やな．．．。

それとも下手に動き回るより、こっちで待ってたほうがええんやろか。

和葉との約束も守らなあかんしな．．．。

遠山家の表札の前で俺はバイクを停めてしゃがみ込んだ。

「京都か・・・」

目を閉じると瞼の裏に桜が舞い散る。

俺の初恋の人が手まり唄を歌ってる。

その声を記憶の中にある小さい和葉と現在^{いま}の和葉の歌声が重なって、俺を眠りの中へと誘った。

「ずっと寝てなかったから・・・なんや・・・眠とうなってきた・・・」

壁にもたれて、ヘルメットを抱えたままですいつの間にか深い眠りに堕ちていった。

「平次・・・平次・・・!」

ゆっくり目を開けると目の前に和葉が心配そうに俺を覗き込んでいた。

「ん・・・なんや和葉か・・・どないしたんや?」

「どないした・・・って聞きたいのはこっちやわ!なんで・・・。こんな所で寝たら風邪ひくで」

久しぶりに聞く声に、徐々に脳がクリアになっていく。

「うう寒！・・・そうや！和葉・・・今日は・・・なんや自分から約束しといて遅れてスマンかった」

「・・・ええよ。うちも待たずに出かけたからお相子や」

「そうか。出かけてたんやったな・・・ん？んん？」

「オマエ沖田と京都に行つてたんやろ？なんでここにおんねん！」

俺が訳が分からないという顔をしていると横から

「なんで・・・？なんでいうたでこの男」

少し苛立ったような声で沖田の声がした。

「あんなあ・・・。せつかくデートに行つても和葉ちゃん楽しそうやないんや。笑ってくれるけど無理に笑つてるような気がしてなあ。なんでか聞いたらなんていうたと思う？」

俺は沖田の顔を見上げた。

「待つてるかもしれへん・・・って。お前は約束の時間にいくら遅れても必ず来るはずや言うてな。泣きそうな顔で言うんや」

その言葉に和葉は下を向いた。

和葉・・・やっぱりオマエは俺にとって一番の女や。

俺は和葉の手を引っ張り自分に引き寄せて抱きしめた。

「へ・・・平次？」

沖田は大きくため息をついて

「俺、帰るわ。今日の事は後で和葉ちゃんから聞かせてもらうつとして・・・これ以上俺を怒らせるような事したらホンマに貰うからな・・・覚悟しとけや」

「・・・肝に銘じとくわ」

和葉を抱きしめる手に力が入る。

「沖田君。ありがとう」

そういつて俺の腕を解いて沖田の所に行こうとした和葉をしっかりと抱きしめた。

「なんなん。平次離して」

それを見た沖田が

「そうやってしつかり捕まえときや。そして・・・和葉ちゃん。俺らは友達や。そやからなにかあったらいつでも俺の胸に飛び込んできてな。待ってるさかい」

そう言つてバイクに乗つて去つていった。

そして静かな時間が2人の間を包み込んだ。

F r i e n d s 9 平次サイド〜自己嫌悪〜（後書き）

次はラブラブ平和で終わりにしたいと思います。急いで書いたわりに結構・・・ラブ×2です。

無理やりまとめた感じもありますが予定の10話締めにしたいと思います。

楽しんで書いてよかったです。

では続きをどうぞ！

F r i e n d s 1 0 平次サイドくこれからはずっとく（前書き）

ごめんなさい。

これが最終話となりました。
なぜ？

それは二人がいい感じだからです。

楽しんで書いていた分、かなりの駄文、小説とはほど遠いものとなつてしまいましたが、それでも読んで下さった皆様には感謝します。

Friends 10 平次サイド／これからはずっと

最初に口を開いたのは和葉だった。

「平次・・・うち・・・この状況がよく分からんのやけど・・・」

腕の中で和葉が顔を赤くして言った。

「そうか？俺はよく分かってるけど？」

和葉が顔を上げて首を傾げた。

「なにが？うちが大事な幼馴染って事？それとも大事なお友達にでも昇格したん？」

「なに・・・しょーもないこといってんねん」

俺は和葉に唇を合わせた

「これでわかったやろ？」

和葉が俺の方を見つめて・・・いや、凝視してる。

「和葉？」

なんやどないしたんや？

「おい・・・和葉？」

なんも言わへんとちよつと心配になるやんか。なんか言ってくれ。

「和葉・・・しつかりせい和葉！」

「平次・・・あたし・・・」

和葉が何かを言おうしたと瞬間に・・・泣き出してしまった。

よく泣く女やなあなんて思いながら愛おしくて優しく和葉を抱きしめた。

泣き止むまでこうしているか・・・。

そうや、工藤に明日そっちに和葉と行くいうて連絡せな。
なんだかんだゆうて心配させてしもつたさかいな。

和葉も工藤の彼女にあつたら喜ぶやろうし。

「平次・・・」

たまにはお土産買っていかなアカンなあ。

この後和葉とちょっと出かけてみようか。

土産にたこ焼きじゃ・・・冷めてしまうしな。

「平次・・・ちよつと平次」

今度あいつらきたらたこ焼き美味しいとこみつけたから連れて行つたらな。

工藤の驚いた顔みてみたいよなあ・・・なあ和葉？

「すごい熱や！取り合えず家に連れていかな・・・。お父ちゃん平次が・・・」

「なんや！どないしたんや平次君」

なんや・・・和葉の声が男に聞こえる・・・俺・・・まだ和葉に言つてない事が・・・。

『で、二人して風邪をひいて来れないのか？』

「そーなんや。なんでやろうなあ・・・ハハ・・・」

『まあ・・・いいんじゃないの？どっちみち近いうちに来るんだろ？』

「そや。事件の事で気になる事あるし・・・そんな時は二人で邪魔させてもらうわ」

『沖田・・・と和葉ちゃんはどなたんだ？』

「それが・・・あいつらメル友になって内緒でやり取りしてんねん。和葉の携帯見せるゆうても絶対みせてくれへんし・・・今度和葉がいない時こっそり見たんねん」

『やめといたほうがいいぜ・・・絶対・・・な』

結局俺は和葉に好きだとか愛してるとか言っへんけど、友達のままにならずにすんだみたいや。

いまでもやつぱり大事な幼馴染やし、恋人のような甘い空気にはなかなかなれん。

けど和葉は前よりも近くに感じるし、更にそばにいてほしいと思う

ようになった。

それは友達に一旦なったからやるか？

それとも沖田の手の上で遊ばれてたんやるか？

どっちにしても遅かれ早かれこうなっていたんかもしれんな。

「和葉」

「なに平次？」

「東京で工藤達抜きで行きたい所はないか？」

「ええよ。蘭ちゃんに会えるだけでうれしいねんもん」

「赤まる付けた雑誌のとき、行かんでもええんか？」

俺がニコニコしながら和葉に聞くと、和葉は慌てて雑誌を隠した。

「平次なに勝手に人の本見たん！スケベや！変態や！」

うるたえてる和葉を横目に

「分かったって。そうなるよう頑張るさかいに期待して待つとけ」
「なに言ってるの！平次アホやる！」

そんな時にきちんと愛の告白ちゅうやつをしたるからな。
似合わん言って笑うなよ。

そんでな、ずっと俺の女でいてくれ。

頼んだで・・・和葉。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3117b/>

Friends

2010年12月30日00時02分発行